アスムの夢

兎角

老人と海とぼっち

出来るだけのことをしたつもりだった。その上で、このざまだ。

新年度を迎え、高校二年生になった芦田アスムは、新しい教室と新しい同級生の中で、一人、椅子に座ったまま、４、５人で輪を作っているクラスメイト達を眺めていた。眺めつつも、目が合うと気まずいので、時折、窓から遠くを眺め、いかにも彼らに興味がなさそうに振る舞う。

自分から人に話しかける事が苦手で、一年生の時は、友達が一人も出来なかった。幸か不幸か、平和な高校のおかげで、ひとりぼっちでも特にいじめなどは受けず、一クラスメイトとしてクラスの空気に馴染んでいたが、それ故、大した変化もなく、友達を作るきっかけもなく、あっという間に一年が過ぎてしまった。

イメージトレーニングは、完璧だった。この日を逃せば、また同じ一年が始まると思い、有り金全て使って妄想ギアを買って日々友達を作る練習をしていた。

妄想ギアとは、任意の夢を見ることができるガジェットだ。五十年近く前に生まれた機械であり、エントリーモデルならば、比較的安価で買える。高校生でも、落とし玉とお小遣いを貯めれば、買えないことはない。人と遊ぶ時間も金も必要ないアスムは、簡単にお金を貯めることができ、欲しいと思った日から早半年で購入した。

アスムは妄想ギア「BOCー２０００」を使い、日々、友達を作るイメージトレーニングをしていた。しかし、こうしてまた一人ぼっちでいる。

アスムは、窓の外で飛んでいるカラスを眺めながら、自身の敗因を考えた。妄想ギアは任意の夢を見るガジェットだ。当然、装着者の期待通りの夢になる。アスムは、アスムの描く理想的なシナリオばかり、夢に見ていた。友達のいない人間が描いた、友達の出来るシナリオなど、現実から離れたものばかりで、いざ始業式を迎えても、実際起こるわけがない。なによりアスムが考えていなかったことは、クラスメイト全員、一年生の頃、既に友達がいることだ。クラス替えがあっても、大半は知り合いであり、一年生の頃のように、積極的に友達を作らなくてもいいのだ。

あんなに気張っていた自分が、いまさらながらとても恥ずかしい。逃げ出してしまいたい。現実の見えていない自分が惨めで仕方がなかった。

気持ちの沈んだアスムとは正反対に、カラスは青い空を悠々自適に遊覧していた。まるで海を泳いでいるようだ。

「海がどうしたって？」

心の中を覗かれたようで、アスムは慌てて隣を見た。男子が座っていた。華奢で、校則をほとんど守っていない長い髪の男子が、ヘラヘラ笑っていた。

いつの間に座ったんだろう。

「海がどうしたって？」

男子は繰り返す。アスムはどう答えればいいか分からない。カラスが海を泳いでいるようだなんて、そのまま言えば、きっと変人扱いされる。変人扱いされたら最後、一年間、変人キャラとして定着される。

　だからと言って何も言わないわけがいかない。間が空かないように、とっさの判断で「海が好きでさ」と、アスムは言った。悪手だ。
「そうなんだ」男子は相変わらずヘラヘラとした笑みを浮かべながら言った。どうやら、彼はこれが通常の顔つきらしい。
「海かぁ。よくじいちゃんに連れていってもらってさ。別に好きじゃないけどね、俺は。じいちゃんが海好きらしくて」
　一体何の話が始まったのかさっぱり分からないが、アスムは唯、おじいちゃんキャラとして扱われないことだけを祈った。
「おじいちゃんと一緒に行っていたんだ、海」アスムは相手の言葉をほとんどそのまま返した。
　会話を繋げる手法はいくつかあるが、アスムは二種類だけ覚えている。ひたすら相槌を打つか、相手の言葉をオウム返しするかの二種類だ。相手の言葉を繰り返すことで、しっかり聞いているかのような雰囲気を醸し出すことができる。さらに聞き間違いを確認することもでき、これは便利だと、すぐに覚えた。
「無理やり連れて行かれたようなものだよ。行って泳いだりするわけじゃない。じいちゃんはぼーっと海を眺めるだけだし。最初の頃は俺だってはしゃいでいたけど、そのうち飽きて、早く帰りたくて仕方なかったよ」
　ヘラヘラした男子の表情から感情を伺うのは難しかったが、変わらない表情が妙に怖かった。本気で嫌だったんだろうな。男子のおじいちゃんは、孫を喜ばせる為ではなく、純粋に海が好きだったのだろう。
　アスムは一度だけ海に行ったことがある。あれは家族で遊びに行ったのだろうか。あまり楽しくなかった。小さい頃から人が苦手だったアスムは、当然人混みも苦手であり、日本中の人間がここに集まっているのではないかと思うほど敷き詰められた人間達を見て、吐き気、めまい、頭痛に貧血、あらゆる症状を発したアスムは、一日中、海の家にいた。今でも、焼きそばの臭いを嗅ぐと気分が悪くなるのは、あの海の家に原因があると思う。
「まぁ、そのじいちゃんがこの前死んじゃってさ」
　急な展開にアスムは何と言えばいいか分からなかった。思えば、この男子に話しかけるシチュエーションも、話の内容も、何もかもが唐突すぎてわけが分からない。もしや、彼はツッコミを待っていたのだろうか。会話の中であえてトンチンカンなことを言い、相手に訂正させるコミュニケーションがあるのは知っているが、そんな高度なやりとり、僕にはできない。
　アスムの困惑が顔に出ていたのか、男子はやっと笑って言った。
「急にこんなこと言ったら、普通びっくりするよな。ましてや未だお互い名前も知らないのに」
　男子の名前は佐々木サンジと言うらしい。どっかで聞いた気がする。一年の頃は違うクラスにいたようだから、元クラスメイトの知り合いか何かだろう。教室で名前を聞いたのかもしれない。名前を知り、ここからは互いの情報を交換して、友達になる第一歩を踏み出すと思ったが、サンジは変わらずおじいちゃんの話を続けた。
「じいちゃんが死んでさ、家族みんなで遺品整理していたわけ。すると妄想ギアが出てきてさ」
　アスムは思わぬ共通点を発見し、一瞬興奮したが、表情には出さなかった。自分が妄想ギア

を持っていることは、あまり口外しない方がいい。世間では、妄想ギアは根暗な人間のお粗末な癒やし道具であり、それを持っている人間は、オタクの中でも特に危険な人間として扱われる。
　実際、妄想ギアは、任意の夢を見るだけでなく、装着者同士で、架空の部屋の中でコミュニケーションが取るこができるという、コミュニケーションツールの側面も持っている。というより、それが本来の使い方だ。しかし、現代ではそこまでして人と繋がりたくはないという意見が大半で、妄想ギアを使ってコミュニケーションを取る人は全くと言っていいほどいない。
　妄想ギアの話をすれば、どういう扱いをされるか分かったものじゃない。しかし、妄想ギアの話題を出したサンジの意向がよく分からない。アスムは「おじいちゃん、妄想ギア使ってたんだ、すごいね」と当たり障りないことを言った。
「すごいよな、しかもかなり年季が入っていてさ。白い所が黄色くなってるんだよ。父ちゃんに聞いても、じいちゃんがそんなもの持っているなんて知らなかったって言うしさ。きっとじいちゃんが子供の頃の機械じゃないかな」
「そんな昔から妄想ギアあるの？」あることは知っていた。妄想ギアは５０年以上前に商品化されたものだ。旧式であれ、今と出来ることは変わらないはずだ。
「あるみたいだよ。５０年くらい前の製造年が書いてあった」
「骨董品じゃん。すごい価値あるかもね」会話の節々で相手を褒めると良いらしいので、アスムは実践してみたが、サンジの顔は変わらずヘラヘラしていた。
「そうかな？大分黄ばんでるからなぁ。まぁ、それでさ、使ってみたんだよ。妄想ギア、初めて使ったんだけど、あれ、すごいな」
　口調の変わらないサンジは、興奮しているのかどうか見分けがつかない。
「どんな夢を見たの？」アスムはそう言ってから後悔した。自分の願望が反映された夢なんて、他人に言いたくないはずだ。
　アスムの憂いが無意味なほど、サンジは素直に答えた。
「最初は自分の部屋にいてさ。窓から飛び出して見たんだ。落ちると思った途端、ふわっと体が浮いたんだよ。そのまま高い所から街を眺めたんだ。高い所から自分の街なんて見たこと無いから、あれば全部俺の想像なんだろうけど。興奮したなぁ。でもな、街に人が全然いなくてさ。すごい不気味だった。所詮、夢なんだから仕方ないと思ったけど、怖くなったから、帰ろうと思ってさ。後ろを振り返ったら」
「ねぇ、そこ私の席なんだけど」
　いつの間にかサンジの横に、女子生徒が手を組んで仁王立ちしていた。
「あ、ごめんごめん」
　サンジはヘラヘラとしたまま、立ち上がりフラフラと後ろの方に行った。
　アスムは、サンジの話の続きが気になって仕方がなかったが、それ以上に隣の席が女子生徒だということが痛烈に痛かった。隣の席は、一番友達になりやすいはずだが、それが女子だと話が変わる。同姓の友達すらいないアスムにとって、異性の友達なんて、できるはずがない。話しかけることすら出来ない。
　教室の前扉から先生をが入ってきた。視界の隅に隣の女子を入れつつも、顔は一度も見れなか

った。

　結局、友達を作れずに一日を終えてしまった。隣の席の女子はさっさと何処かに行ったのは、正直助かったが、席一つ分の空きが、クラスメイト達を遠くに感じさせた。あれからサンジとも話していない。サンジは友達がたくさんいるらしく、見かける度に違う人と話していた。思えば、友達でもない僕に、おじいちゃんの話をするほど、気さくな男だ。
　大半は今日知り合ったばかりの人なのかもしれない。
　あれくらい気さくじゃないと、友達なんて簡単に作れないんじゃないか。アスムは、周りに気づかれないように、天井や備品を眺める素振りで、クラスメイト達を見た。一人の席に集まっている人達。後ろの方で立ちながら話す人。誰とも話していないように見えたが、廊下から声をかけられて、安心したような顔を見せる人。この中の誰かに、特に話題もなく話しかける。考えただけで心臓の鼓動が、体を揺らすほど強まった。
「何キョロキョロしてるの」
　一段と強く心臓が脈打ち、アスムは後ろを振り返った。サンジが座っていた。
「や、別に」急に話しかけられると、本音も建前も出てこないことを初めて知った。
「いやさぁ、さっきの話、中途半端だったじゃん」
　サンジは机に体を寄りかかりながら、だらしない姿勢で言った。彼に骨は無いのか。
「オチってわけじゃないけど、あそこから話を続けるのも野暮だし、ちょっと悩んでいたんだ」
　サンジは、悩みとは無縁な顔をしていた。
「うち来てよ」
　サンジが言うことは、いつも唐突だ。
　サンジの家に遊びに行くのかと思ったが、サンジの家の前まで来ると、サンジは「待ってて」と、一人で家に入った。まもなく戻ってきたが、古びた妄想ギアを差し出し「これ使ってみてよ」と言った。
　使ってみれば分かるから。そういうと彼は手を振って僕を見送った。

　今朝、友達を作るために、意気込んで飛び出した自宅の玄関に戻ってきた。いきなりたくさんの友達を作れるとは思わなかったが、まさか一人も出来ないとは。しかも友達にもなっていない同級生の祖父の遺品を片手に帰宅するなんて、どうやって想定するのか。玄関を開くと、母の甲高い声が迎えてくれた。
「おかえり」「ただいま」「どうだった」「別に」靴を脱いで、二階に上がる。自分の部屋の扉を開き、机に鞄を投げ捨て、ベッドに飛び込む。右手に握ったサンジの祖父の妄想ギアが、目に入る。
　使う気になれない。そもそも本当に使えるのか。一人ぼっちの人間をからかうために、サンジは壊れたオンボロを僕に渡したのではないか。今頃、僕を話の種に、僕の知らない人達と笑い合っているのでは。サンジに対する不信と、ひとりぼっちでいる自分に話しかけてくれた感謝の気持ちが葛藤する。

使えなくてもいいか。それはそれで、もうどうにでもなれ。
半ば、諦めに近い気持ちで、妄想ギアを頭に装着した。普段使っているBOCシリーズとは違う、装着感に新鮮味を感じる。BOCシリーズはメガネに近く、装着感ゼロを宣伝文句にするほど軽い。しかし、この妄想ギアは旧式らしく頭に全然フィットしない。おでこから鼻先まで覆い、さらにヘッドフォンのように耳全体を包む。電源を点けようと右耳
辺りを触れるが、見つからない。一度外して、手に持ち、あちこちを調べる。電源は鼻先にあった。もう一度付け直し、鼻先を押す。
暗い視界に型番らしき数字が浮かび上がる。MOS－３７。３７という二桁しかない数字が年季を感じさせる。BOCシリーズなら、眠気誘発音楽を流した後、事前に設定した妄想範囲を脳内に展開してくれるのだが、どうやらこの妄想ギアは特にそういったことはなく、型番を表示したあとは特に何も動作しなかった。
このまま寝るのを待つしかないみたいだ。そんな簡単に眠れないと思ったが、久々の学校で、しかも知らない人、サンジと会話したことが精神的疲労だったのか、アスムは簡単に寝てしまった。

長く真っ直ぐに伸びる廊下を、窓からこぼれ落ちた日差しが照らしている。床の目地すら見えないほど眩しいが、それは妄想ギアの光の描写性能の問題だと、悟った。
夢の中で夢だということに気づくのはたやすい。大半は一瞬で気づく。
夢の中の世界は、とてもキラキラしている。脳内とはいえ、機械による映像に過ぎないので、３DCGの範疇を超えないのだ。特にMOSシリーズは旧式のせいか、世界が艶々している。ゴミひとつ落ちていない。
一日中学校にいたのに、また学校に来るなんて、そんなに学校が好きなのだろうか。
廊下には誰も居ない。横には自分のクラスの扉がある。扉は閉まっている。開けたら、何が待ち受けているか、簡単に分かる。目の前に希望のものが露骨に置いてると、人は飛びつくのを躊躇うのだろう。あからさまに与えられることを、侮辱だと感じるのだろうか。誰が僕を侮辱しているのだろう。MOS－３７か。そんなわけがない。MOS－３７は僕の希望を叶えてくれているだけだ。僕は今日、恥すら感じていたのに、それでもまだ望んでやまない。扉を開けたら手に入る。ため息が出る。欲しいと望んでいるのに、体が重い。不思議だ。MOS－３７に感情があれば、彼の方が不思議がるだろうな。
廊下を見渡す。壁と天井の堺が曖昧に白く歪んでいる。所々の描写が甘い。僕があまり廊下を見ていない上に、MOS－３７の描写補正の限界がこれなんだろう。
ひと通り廊下を見渡すと、アラタは扉を開いた。

「おはよう」
扉を開くと、横から隣の席の女子が挨拶をしてくれた。おはようと、返事を返すと、近くの席に座っている男子も挨拶をしてくれた。
「おはよう」

「おはよう」
「おはよう」
　教室のあらゆる方向から、声が聞こえてくる。クラスメイト達の顔は、どこかで見た顔だ。
　どこかで見たことがある顔の中に、今日はじめて見た顔があった。
「おはよう」サンジが言った。相変わらずヘラヘラしている。
「どうだった？じいちゃんの妄想ギア」
「今まさに使っている最中だよ」
　サンジはヘラヘラしたまま何も答えない。
「なぁ、アラタ、昨日のテレビ見た？」何処かで見た顔のクラスメイトが、在り来りな世間話を繰り出す。
「見た見た。すごかったよな」中身の無い返事をアラタは言った。これでいいのだ。別に中身なんて必要がない。決まった返事も、伝えないといけないこともない。これは返事をする練習なのだ。
　中身の無い会話を繰り返し、皆で笑い合う。バーチャルだと、こんなにも容易いのに、いざ本番になると、どうして顔が強張るのだろう。笑う何処かで見た顔のクラスメイト。ヘラヘラするサンジ。腹を抱えて笑う僕。教室の隅にポツンと立っているおじさん。
　ん？おじさん？

「やっぱり出たかぁ」隣の席に座りながら、サンジは言った。アスムは隣の席の女子がいつ戻ってくるかドキドキしている。
「俺も最初は度肝を抜かれたよ」遺品の妄想ギアを使っていると、あのおじさんは必ず出てくるらしい。不自然な場所にいつの間にか現れるらしい。顔は無表情で、特に何かしては来ない。
「怖いよなぁ、あのおっさん。この妄想ギア、呪われているんかな」サンジが両手で妄想ギアをいじくり回していると、隣の席の女子が戻ってきた。また怒るかと身構えたが、女子は何も言わず、むしろ妄想ギアに興味津々だった。
「それ妄想ギア？古臭いね」
「使ってみる？」
「えー、いいよ」
　普通に会話をしているサンジを見て、アスムは心から尊敬した。昨日、あんな気まずい雰囲気だったのに、既に普通に接する仲になっている。いや、昨日の時点でサンジが何かしらお詫びを入れているのかもしれない。
　サンジの凄さに感心していると、二人の会話に入れなくなってしまった。サンジは昨日と同じようなおじいちゃんの話をしている。サンジが手に持っている妄想ギアの型番が目に入った。MOSー３７。アスムはスマートフォンを取り出し、検索サイトに入って、「MOSー３７」と打った。妄想ギア解説サイトに繋がる。
　解説サイトによると、P90社が初めて制作した妄想ギア。システムとして、商品として既に市場は海外の製品が主流の中、特に新しい機能の無い後追い品であったらしい。また、当時人気の他

社製品の機能である、シチュエーションを外部メモリーに入れて、妄想ギアに挿すと、任意のシチュエーションを楽しめる「シチュエーションドリーム」機能を搭載したことが、模造品のイメージを植え付けてしまったようだ。その反面、壊れにくさは随一で、さすが日本製品という書かれ方をしている。広告等もぱっとせず、二番煎じの空気が強い中、使用者の事故死によって製品は回収されてしまい、現在市場にはほとんど出回らないようだ。
　事故死。引っかかる。今度は「MOS-37　事故死」で検索を始めた。嫌な予感は当たった。
「サンジ君、これ」アスムはサンジにスマートフォンの画面を向けた。横から女子が顔を出す。
「なにこのおっさん」と女子は言った。
　サンジの目が少し大きくなった、気がした。
「あのおじさんじゃん」どしたの、とサンジはアスムを見た。
「MOS一３７で調べたら、事故の話が出てきてさ」新聞のアーカイブから事故の記事を取り出し、事故で死んだ人の名前を新たに検索した。そうして出てきた写真には、昨日の夢のおじさんが写っていた。
「まさか幽霊？」
「さっきから何の話してるの」サンジの一言に女子は一層食いついた。
「これを使えば幽霊に会えるんだよ」サンジは妄想ギアを差し出した。
　意味分からないし、と女子は眉間に皺を寄せた。
「でも何でおじさんが出てくるんだろうな。この妄想ギアは元々おじさんのものなんかねぇ」サンジが差し出した妄想ギアを女子が受け取ると、サンジはこちらを振り向いた。
「うちのじいちゃん、事故と関係があるのかなぁ」
「事故があったのは、MOS一３７が発売して間もないみたい」
「同じ妄想ギアを、今日まで起動できるほど大切にしてて、しかもおっさんが出てくるってんだから、関係ないわけがないよね」
　サンジとアスムがおじさんについて考察をしている傍らで、女子は妄想ギアを顔に付けていた。

「出てきたよ、おっさん」隣の席の女子は、目の下に隈を作っていた。昨日、サンジから妄想ギアを借りて帰った女子は、さっそく妄想ギアを使ったようだ。夢の中でおじさんに出会って驚き、飛び起きたのが午前二時。それから眠れなくなってしまったらしい。アスムは「お疲れ様」と言った。
「最初は遠くにいたんだけど、あんたかと思ったよ」女子は目を薄め、少し体をアスムから遠ざけながら「うん、やっぱり似てる」と言った。
「そうかな」と言いながら、アスムは心の中で全力で否定した。
「で、近づいて見れば、全然知らないおっさんだし」女子は、キモいやウザイを幾度も繰り返し呟いた。僕に似ているおじさんが罵詈雑言を浴びている様を眺めていると、少し心が痛い。
　アスムは女子から妄想ギアを受け取った。少し、緊張する。

　アスムは妄想ギアを裏返し、蓋を外した。中には端子が並んでいる。
「何してんの」妄想ギアを睨むアスムに女子が言った。
「いや、ちょっと。記憶メモリーを」
「あんた、私の夢を録画してたの!?」女子は机を叩いて叫んだ。
「違うよ！き、昨日思い出したんだ」
　アスムは昨日、自分の妄想ギアを眺めながら、おじさんの謎を考えていた。製造時代が違うとはいえ、同じ妄想ギアである以上、何かヒントになるものが無いかと、あちこち触った。普段は開けないメンテナンス蓋を開けてみると、中には色々な端子が並んでいた。多くの機械の例に漏れず、妄想ギアも、使うかどうか分からない端子や規格をたくさん持っている。テレビと繋ぐ端子も付いているが、未だ夢を映像化する技術は無いので、一般的には使いようがない。妄想ギアは、テレビ代わりに使うことも出来る。その際に、装着者と同じ映像を見るためにテレビと繋げるらしいが、はたしてその機能は必要なのか、アスムには理解出来なかった。
　メンテナンス蓋を開けるまで忘れていたことがある。妄想ギアは外部記憶メモリーを差し込めることが多い。アスムの妄想ギアもSDカードを差し込めるようになっている。これは各会社から映像データをSDカードで販売してもらい、妄想ギアに差し込んで使用することを想定しているようだ。ただ、今はインターネットから直接データを読み込む方式が主流なので、外部記憶装置などまったく使わない。では、サンジのおじいちゃんの妄想ギアは？
　インターネットで調べた通り、MOSー３７のメンテナンス蓋を開けると、中には古い規格の端子と並んで、記憶メモリの挿入口があった。しかも、何か刺さっている。
　記憶メモリーだ。中身を見たら、おじさんの事が何か分かるかもしれない。
　記憶メモリーのことをサンジに言うと、サンジはメンテナンス蓋の存在すら知らなかったようで、心底驚いていた。と思う。相変わらずヘラヘラ笑うだけだった。MOS-３７に付いている記憶メモリーは古い上にアスムは見たことが無かった。ところがサンジに見せると「これ知っている。おじいちゃんのパソコンが挿せるやつだったと思う」と言って「うちおいでよ」と、聞いたことある台詞を言った。

「こんにちは」アスムは、教室の隅に立つおじさんに声をかけた。
　おじさんは変わらず無表情のまま、アスムを見ている。
「あの、えと」何も言わずにじっと見つめられると言葉に詰まる。アスムは自分の夢の中で人見知りを発動していることに理不尽を覚えた。
「あの人が待ってますよ」アスムは教室の扉を引いた。眩しいほどの日差しが教室に差し込んだ。教室は廊下に通じているはずが、扉を引いた先には砂浜が広がっていた。
　海の音が聞こえる。
　おじさんはまだこっちを見ている。
　扉の向こうから風が吹いてくる。涼しさは感じない。風と共に砂が教室に撒き散らされた。おじさんの靴に砂が被ると、おじさんはやっと扉の方を向いた。
　逆光の中、砂浜に人が佇んでいる。おじさんは、砂を踏んで、扉の向こうに消えた。

光が眩しい。

砂浜で走ったり、砂を踏んだり、波と葛藤する女子を、アスムとサンジは並んで座りながら見ていた。
「なんで、あの子も来ているの？」
「いや、なんか、海行くって言ったら、私も行くってさ」サンジは顔色も変えずに言った。まったく何を言っているのか分からなかったので、これ以上聞かないことにした。
「あのおじさん、もう出てこなくなったよ」サンジは頬杖をついている。よかったねと言うべきか迷って、アスムはまたしても何も言えなかった。
「海に行きたかった、ってわけじゃないよな。あのおっさんはさ」
サンジの家に上がり、サンジのおじいちゃんのパソコンを倉庫から取り出した。起動させてもすぐエラーをお越し、何度か再起動させて落ち着かせるのに何時間もかかった。ようやく記憶メモリーを挿すと、中にはほとんどデータがなく、二人は肩を落としてあからさまに落ち込んだ。中にあったデータの拡張子を調べると、古いメールの拡張子らしく、メールソフトを使って読み込もうとしたが、ソフトにパスワードが掛かっていて、使用することが出来なかった。故人とはいえ、メールを読むのはマナー違反だ。我に返ったアスムは、サンジに辞めようと言ったが、サンジは「大丈夫、大丈夫」と言うだけだった。
結局、別のメールソフトをダウンロードし、ようやく中身を見ると、受信メールはほとんど一人からだった。事故で死んだ男の名前が、送信者欄に書かれていた。最新のメールソフトを使っているせいか、メールの内容は文字化けして読めなかったが、添付されているデータを開くことが出来た。
海岸のシチュエーションデータだった。
どうやら二人はメル友で、死んだおじさんが、サンジのおじいちゃんに海岸のシチュエーションデータを送ったようだった。アスムの予想では、きっと二人でシチュエーションエリアに行く予定だったのだろう。いや、行ったんだと思う。二人は海岸シチュエーションエリアで会った。しかし、あのおじさんが妄想ギアを装着中に死んでしまった。突然のエラーにより、妄想ギアはおじさんの意識データをシチュエーションエリアから弾き飛ばしてしまった。しかし、元の肉体は死んでいるので、行き場を失ったおじさんの意識データは妄想ギアの中を彷徨ったのだ。、消えることもなく、妄想ギアのメモリーに残ってしまったのだ。送信済みのメールが、表に出ずに、サーバー内で漂っていたようなものだ。
アスムが自身の予想をサンジに述べると、じゃあ海岸のシチュエーションエリアに誘導しようとサンジは言って、アスムに妄想ギアを差し出した。かくしてアスムは教室の隅に立っているおじさんを海岸のシチュエーションエリアに誘ったのだ。
「あのおじさんってさ、意識あったのかな」サンジは言った。
「多分、ただのデータだよ」
「そうであって欲しいよ。だって何十年もさ、妄想ギアの中に閉じ込められてるなんてなぁ。あ、でも」

　アスムはサンジの方に振り向いた。
「じいちゃん、何となくおじさんが妄想ギアの中にいる気がして、捨てられなかったのかも」
「そうかもね」アスムはまた前を向いた。
「サンジ君のおじいちゃんは、おじさんに会いたくて、海の夢を見たかったのかもね」
「そのために、俺を海に連れて行ったって？迷惑な話だな」サンジは変わらずヘラヘラしている。
　MOSー３７は光の表現が過剰で、かなりキラキラ光って見える。きっと、サンジのおじいちゃんは、妄想ギアで見た海の風景に感動したのだろう。もしかしたら、それが初めて見た海なのかもしれない。海を見てみたいと言って、あのおじさんがデータを用意し、二人で海岸のシチュエーションエリアに行ったのだと思う。
「おじいちゃんはおじさんに会えたのかな」
「どうだろうなぁ」
　アスムはスマートフォンを取り出し、おじさんの写真を開いた。
「あのさ、聞きづらかったんだけど」アスムはスマートフォンを見ながら言った。
「僕に話しかけたのって、僕がおじさんに似ていたから？」
「うん」サンジも多分、こっちを見ていない。
「しかも海がどうのこうのってつぶやていたじゃん？なんかおじいちゃん思い出しちゃってさ。気づいたら話しかけてたよ」
「じいちゃん達みたいに、俺ら良い友だちになれるかもよ」
「どうだろ」そんなこと言われても困る。まだ友達にもなれていないのに。
「良い友だちになれるかもしれないから、一つ聞きたいんだけどさ」
　なに？とアスムは聞き返した。サンジは顎を前にクイッと動かして言った。
「あの子の名前、なに？」